

言葉は文化, 言葉は魂

中尾 征三¹⁾

20年以上前に、あるフランス人が、“コーヒープレイク”のことを“ポーズ”と書いたのをみて、私は、そのころ普及し始めた、カセット式のテーブ・レコーダーの一次停止機能の“pause”を思い出し、それが元来はフランス語だということに気づきました。それをきっかけに、私はブレイク(break)という言葉が気に入り、これとよく似た車のブレーキ(brake)が、英語としては全く同じ発音であることに気づきました。そして、我々の先輩がこれら二つの外来語を混同しないように、意識的に発音を変えて使うようにしたのではないかと思ったのです(少し考えすぎでしょうか?)。

少し異なる例ですが、野球のストライクと労働争議のストライキ、野球の二塁(セカンド)とボクシングの介添人(セコンド)は別の言葉として使われていますが、英語では綴りも発音も同じ一つの言葉です。また、同じ意味でも、使い道によって発音が違うものに、テニスの“ボレー”と、バレーボールの“バレー”があります。バレーボールは、必ずボールを地面にバウンドさせないで打ち返す、まさに“ボレー”の連続技で成り立つ球技なのです。

さて、言葉(言語)は単なる道具ですが、使いこなされたものは、外来語であっても磨かれています。一方、カタカナ表記が不適切であったり、元来の意味に無頓着な使い方をされている外国語もあります。地球科学の世界での例ですが、マルチナロービーム測深機による海底地形のスワッス・マップピングで、芝生の刈り幅という意味のスワッス(swath)をスワッシュと書くと、砂州の間の“水路”や水のはねる音(swash)という紛らわしい言葉を連想します。また、帽子などの羽飾りを意味するブルーム(plume)という言葉も、海底熱水のブルームとかマントル・ブルームとして使われる時に、水平方向にたなびく形態を無視し、単に海水中に放出される熱水の塊や、地殻あるいは地表に現れるマ

ントル起源のマグマの量を表現することが多いようです。

さらに、適切な訳語を考えずに定着していないカタカナ語を濫用されると、議論そのものが借り物ではないかと疑ってしまいます。

先日、国の研究機関のあるべき姿を描いたある報告書を読んでいて、強烈な疑問を感じました。その中で出てくるカタカナ語で、英語本来の意味が正しく理解されていないと思われるものを対応しそうな日本語(一部原文に併記)とともに列記します。たとえば、メリットの本来の意味は“長所”ですが、ここでは私たちが頻繁に誤用するように、明らかに利点(advantage)という意味で用いられています。

フィードバック(見返り)、テニユア(終身雇用)、マルチファンディング(多方面からの予算獲得)、イノベーション(革新的な研究成果)、インディレクトコスト(間接経費込み研究予算)、メリット(長所)、ストライクゾーン(目標設定範囲)、キャリアパス(必要経歴)、ライフサイクル(生涯)、アウトソーシング(外部委託)、フリーゾーン(共通の研究の場)。

もちろん、言葉の意味や使われ方は不変ではなく、時とともに変化します。英語・米語の世界でも、たとえばアウトソーシングという言葉が、定着しているのかもしれませんが、しかし、外部委託と下請けの違いや、テニユア制と我が国の終身雇用制の違い、あるいは任期付任用制とテニユア制の相互の関係、などなど、放置しておく、とんでもない同床異夢の原因となる危険が隠されています。

適切な訳語のない外国語の使用は、新しい概念・新しい文化を輸入することと同じなのです。不適切な訳語の使用や、中途半端な理解の下でのカタカナ語の使用は、思考の放棄を意味します。なぜなら、言葉は文化の担い手、言葉は魂の発露だから……。

1) 地質調査所 海洋地質部